

## 伝道者と生活

(付、某伝道者の体験)

藤澤武義

上

福音伝道者にとり、その生活問題、すなわち福音伝道上・キリスト信仰上、証しが立つよう、1、いかに経済的独立を守って生活するか、2、いかにして神の栄光を表すべき生活態度をとるかということは極めて重大な問題である。それは伝道者自身の重大関心事でなくてはならぬのはもちろん、その伝道者の伝道・広くは信仰生活に直接間接関係ある信者にも関連する重要事なのである。不肖も伝道者の末席を汚す者として、昔から常々この問題について考え、以前から思いつつ遅延したけれど、ここに主として右の1について拙信の一端を記してみたい。

この問題に関する主イエスの教は如何？主は十二弟子 使徒を伝道に派遣する時言命し給うた。

「…行つて『天国は近づいた』と説教せよ。…財布に金も銀も銅貨も持参するな。旅の袋も二枚の下衣も靴も杖も持つな。働き人が食物(を受けるのは)当然だから」

(マタイ一〇七―一〇)

と。使徒たちを始め、古来文字通りかく実行した伝道者多く、日本にもあり、戦時中二回かあった当地方出身の教会の伝道者K君は聖書以外何も持たず、粗服素足で伝道の旅を続け、時には飲まず食わず、苦難・迫害に屈せず、後K市に落着

き路傍伝道を続け、次第に支持信者が出来、立派な教会建設、忙しく広域にオートバイで巡廻伝道を続けている由。無教会でもI・H君など戦後これに近く、主として貧しい漁村や炭坑地帯の子供伝道数年。不肖も戦前戦後これに近く小伝道の旅数回。最近も聖書販売傍ら粗衣粗食歩いて巡廻伝道してゐる人ある由聞いた。

右聖言全体を文字通りに解し、かつ採用履行することには問題がある。一般の註解者は文字通りには解しない。現代的にはなおさらである。なお原文では九節の初頭に「持参するな」の語あり、十節前半の終までかかる。右拙訳では易解のため十節に「持つな」を追加(「靴を持つ」はもち論文字通りの意味でなく「靴をはく」意、「靴」は近代的の靴でなく、皮製ではあるが日本の「わらじ」様の物)

右聖言も他の大部分のと同様、文字通りの採意をせず、その趣旨・精神を採り、原則を重んずることが大切である。殊に伝道者は(権利を主張すべきではないが)十節後半の原則により、純粋な動機と精神による伝道の働きの報酬として、生活に必要な物が必ず与えられる、然り人の懐を当てにすることなく、天父から恩恵として絶対に必ず与えられることを確信して何ら生活問題を心配せず伝道に邁進すること、そしてその伝道を受ける信徒・求道者は信仰と分に応じて、本心からの謝意を何らかの形において呈示することが大切である(ルカ一〇七。コリントI九4―14。テモテI五18)。

主イエスの在世中も昇天後も、弟子使徒たちは大体そのように生活した、することができた。彼等は主の招きを受けるや、従来職業を棄て生涯を献げて弟子となり使徒伝道者となった(マタイ四18―22、九9。マルコ一16―20、ルカ五10

II. ヨハネ一35以下参照)。そして生活一切を主に委ね、信に立ち生活上の不安なく伝道の使命を遂行し完うしたのである。伝道者は皆この信仰と態度に立つことが大切である。召命による現代の伝道者も、主の聖言・お約束に立脚し信じて立つ時、同様使命を遂行し生活することができるのである。

ただ使徒パウロ（と幾分バルナバも）は大分違っていた。パウロはギリキヤのタルソの資産あるユダヤ名門に育ち、同地の大学を出、エルサレムでユダヤ教・聖書を窮め先祖からのパリサイに熱中したが、復活のキリストの御霊に捉えられて熱心な信者・伝道者使徒となり、彼らに劣らず、世的に誇るべき一切をキリストの故に糞土の如く棄て（ピリピ三8）、ユダヤ教ことにパリサイ宗では救われない事を体験故に力説しつつ、次第に異邦人伝道に邁進し三回外国伝道した。そして他の使徒たちに優に勝る働きをし、教義の上にも最も深大な貢献をし、影響を及ぼしたことが周知の通りである。

一般にパウロは伝道生活を、信徒の献金に依らず自ら天幕造りの労働によって支えて来たのだと言われている。が彼の全伝道生涯にそうであったであろうか。そうではなく、パウロ研究者ライトフット、ラムゼイ等の大体的見解の如く、それは主として第二回外国伝道中テサロニケ地方で伝道した時、多分働き、殊にコリントで一年半留って伝道した時、同業アクラの家に宿り共に働いた（次にアクラ夫婦と一緒にエペソに行つて伝道したから、同地でも製幕したかも知れぬ。使徒行伝一八一3、1819）。

紀元四五年頃、キリスト者アガボの預言の通りパレスチナその他に大飢饉あり、ユダヤの使徒たち始め多数信徒が食糧難と貧で困苦していたので、パウロはバルナバと協力し、主と

してアンテオケの異邦人信者の寄附を集め、兩人でそれを持参した（使徒行伝一一28-30、一二25。ガラテヤ二1参照）。

必ずしも直接その続きではないが、間接には幾分続く事情も考え得るし、殊にユダヤ人は五、六百年間も亡国の民として当時口マ帝国の占領治下に在り、多額の税金を課され、貧困して居り、キリスト信者は一層貧苦していたので、パウロはコリントやテサロニケ等の信者に訴えて彼らのため寄附を集めた（コリント一六1-3、同二八、九）。パウロがコリントに行つた時と右文書を書いた時とは大分離れてはいるが、右記章節の文面から推察される通り、行つた時にも右の寄附を奨めたに違いない。彼自身もう貧しくなっていたであろうし、寄附奨集について（右記二九章など上手に説き奨めて居り、そして世には昔から言葉巧みに善男善女から多額の寄附等をかき集め、宣伝の公益や被災難民の救援等に使用せず、己が私腹をこやした宗教家や政治家等無数故）彼は「李下に冠を正さず」で異邦の信徒が疑つたり躓いたりしないように、殊に彼等同様自己の労働の果により母国の同信の困苦を救援すべく、同地等では製幕したのであろう。

第三回外国伝道でエペソには三年間（五一-五四四年頃）滞在したので、天幕造りしたかも知れないが確たる証拠がない。前述同様の推測も困難。

研究不充分だが、以上によりパウロの製幕労働は約三十年の伝道生涯中の短期間、通算して三年位、多くて四、五年位の日数に過ぎないと思う（彼の伝道生活の三分の二以上の期間は旅行と捕囚、旅行の大部分は一市町に数日前後居て伝道し、次々と移巡して行つたので、天幕造りは、多くの材料や

道具も要るし他の事情もあり、最少限一、二か月以上滞在しなければ、また捕囚中では、出来るはずがない)

天幕業の収入以外、パウロの伝道生活は何によつて支えられたか。彼は富家の出であつたから、初期数年間は己が資産によつたに違いない。その初期の頃アラビアの野で祈り冥想・準備に過した三年間はバプテスマのヨハネの如く「蝗と野蜜を食とし」(マタイ三4)断食もしたし、早魃と迫害に会つていたエリヤを神がケリテ川の辺で鴉にパンと肉を運ばせ、ベエルシバの荒野でもパンと水を以て養ひ給うた如く(列王紀上一七4-6、一九6)、神の恩恵で奇跡的に養われたのであろう。

バルナバと共にアンテオケ伝道中、第一、二回外国伝道でクプロやガラテヤ地方では同地の信徒の献金寄附により、初めて欧州入りピリピでの四か月は高級呉服商ルデヤ家で寝食(使徒伝一六12以下)、テサロニケでの三週はヤソンの家(同17-19)、その他方々で信者の献金寄附により生活し得たであろう。「福音を宣伝える者が福音によつて生活すべきを主は定め給うた」(コリント1914。13以前にもこの権利性記さる)。しかし彼はこの権利を用いなかつた。飢渴によろめくこともあつた(同11-27等)。或場合同労の医師ルカが助けただろう。結局すべてに於て主の恩恵、前示諸聖句やマタイ第六章後半の聖訓聖約の通り使命がある限り、天父は一切必要を与え給うた、今も与え給うたのである。

他の使徒達は幾分権利を用いたらしい。教会が出来、同例あり。制度的に牧師宣教師を養う、利害交々、無教会は無制度。世の職業兼伝道がよいと言う人多し。そうも言える。生活不安が一因で片手間伝道の人多く、専門伝道者稀。極めて

残念、寂し。全知全能の天父を仰ぎ、信もて立とう(最悪の場合餓死の覚悟で)。使命ある限り必要を絶対恵与し加え給う。無学無力の僕をも今まで支え給うた。

中

伝道者は、教派教会で制度的に定めている神学校や聖書学院など伝道者養成機関での学修を了えず、その卒業証書と伝道師また牧師など「教職」の免状を受けなくても、キリスト信仰とキリストによる救の経験があり、伝道すべき使命感や責任感があることが本質的に大切である。教会流の神学校出であるなし、その他一般の学歴や経歴がどうあろうと、右の信仰と経験・使命感などが最も重要で、それさえあるなら誰でも伝道者となることができる。生涯を献げた伝道者とならなくとも、平信徒として立派に伝道することができる。内村艦三先生曰く

「キリスト教の伝道とは、我の罪あるを世に表白し、我の受けし恩恵を人に示し、わが救主を世に紹介し、以て彼の従者・彼の弟子を作ることである。…この意味を以てすれば、真正のキリスト信者は誰でも伝道に従事することができる。伝道は説教でもなければ牧会でもない。伝道は我が心に実験せし神の救拯を世に発表することである。この実験なくしては、いかに該博なる神学教育を受けし者であってもキリスト教の伝道師ではない。またこの実験あれば、何人も有力なる伝道師たることができる」(全集第十三卷)

『…伝道は表白であります。これは「汝、罪を悔改めよ」というのではなくして「我わが神の恩恵によりてかく成るを得た

り、我は汝にこの事を知らせん欲す」ということであります。…有力なる伝道は常にかかる伝道であります。パウロの伝道がかかる伝道であったことは、彼が幾回となく彼の改信の実歴を…聴衆の前に述べたことが聖書に記してあるので…また彼の書簡が訓誡的でなくして自己発表的であるのでもよく解ります。』

と、至言である。かくしていかに無学・訥弁・若輩・貧弱な平信徒であつても、罪を赦され、救われた感謝と喜びに溢れ、黙して居れず、その体験を証言する時、彼は立派な伝道者である。学者・能弁者の難解な用語と理論・美辞を列ねた弁舌に優つて、内から溢れる朴訥な蕪辭による証し、事実に遙かに有力な伝道であり、人の魂を動かし、信仰心を起し、信仰を強めること無数の実例がある。

使徒ペテロやパウロは凡そかかる類の伝道者であつた。また十七世紀イギリスの大説教者バンヤンとジョージ・フォックス、十九世紀後半アメリカの大説教者ブルックスや大伝道者ムーディ等もそうであつた。ブルックスは大学出だけれど（納弁。信仰の熱心により納弁に勝つて有力な説教家になつた）、他三者は家貧（バは鑄掛屋の子、ジは靴屋に奉公、ムも父夭折で靴屋の小僧）で小学校位しか碌々学校を出なかつたが、前記体験による伝道、聖霊に満ち、黙して居れず、知と力を得て伝道した。

しかもバンヤンは国教会（聖公会）の免許を受けずに伝道したとて（叱責され伝道を禁じられたが、エレミヤや使徒たちの如くエレミヤ記二〇八以下、使徒伝四一八、二〇、五二八、二九等）聖霊により信仰燃やされ、迫害されても黙する能わず、到る所で、後には墓地で伝道した。体験に基き燃ゆる信仰に

よる彼の証し伝道を民衆は傾聴し歓迎した。威されても止めず、遂に）前後十三年半も入獄させられた。そして牢内で（聖書と他のフォックスの「殉教者列伝」の精読と共に）有名な不朽の大作「天路歷程」(Pilgrims Progress) その他の信仰的名作を多数著わし、出獄後のも含め前後六十巻という莫大であつた。「歷程」その他の著書は、彼の歿後も英国はもちろん、広く欧米諸国で二百年以上ベストセラーで出版され、民衆に愛読され、かくして彼は召天後もすばらしい伝道をしている訳である。

ジョージ・フォックスも『大学で神の人になれる訳ではない。活けるキリスト御自身から教えを受けなければならぬ』と悟り、聖書だけを持ち数年間樹下や山頂で祈りと瞑想、光明を得、二五才から市場や街路、原等で伝道、次第に信徒弟子が増し、フレンドリィ友会という真剣な団体を作つた。

「主の聖言の前に戦慄すべきだ」と唱道し、彼また教団がクエーカー（戦慄する者）と呼称されるに至つた。彼の説教も多くは体験に基き平易で力があつた。前者と同じ理由で迫害され、六回も投獄され、また打たれて仮死状態に陥つたが、その時立上つて『もう一度私の腕と頭と頬とを打ち給え』と答えたという。後クロムウエルやミルトン等も後援、彼の弟子は西欧や米国に増加した。

ムーディも靴店に修業中一八才で回心、聖霊を受け熱心、翌年シカゴで開業、傍ら初めは街頭の子供を集めて伝道した。二一才で日曜学校を開設、次第に大人にも伝道。二三才（一八六〇年）事業を全廃し伝道活動に献身した。会衆派に入り大衆伝道、街教会も創立、大きく発展、平信徒伝道者として活躍、讚美歌伝道者サンキーの協力も手伝い、一層進

展、聖靈に満たされ燃ゆる信仰で超教派伝道、全米主要都市や英国にも数回行って大なる成果を収めた。聖靈の器で逸話あり、名説教で数か国語に翻訳され広く読まれる。良い平信徒伝道者養成の男女別々の学校や聖書学院も開設した。

こんな実例を挙げれば幾らもある。神学校や大学出は駄目だというのではなく、信仰と謙遜を堅持し聖靈によつてするなら、ある場合、大学出や、それ以上の学問をするのもよいが、要は学識の有無に拘らず、地位や富も無用、キリスト者は誰かが責任を感じ、平信徒伝道をすること、そして切禱と信仰実践により聖靈に満ち、聖旨を感じし召命を感じたなら、背水の陣を布いて職業を廃め、献身し全霊全身、全生涯を献げ伝道に邁進すべきなのである。無教会陣にも更に専身伝道者統出すべきでなからうか。

実際問題として、世的また専門如何にもあれ、学識や地位や富などがあると、それらのない者同様の単純な信仰と真の謙遜を持ち難く、えてして学問や聖書知識と信仰とを混同し、高慢と冷淡になり易く、口に善を説き、理屈を言い人を批判しても、余り愛の実行をせず、真剣な命がけの伝道はしない。当時のパリサイ人や学者、祭司やレビ人らがそうであつて、主イエスは度々『ああ禍だ、偽善なる学者・パリサイ人よ』と、詰嘆愛責し給うたが（マタイ二三章、ルカ一〇25〜37等）、現代の学者や伝道者に対しても事情により同様叱責されるであろう。これらは先ず教派の組織制度の中にいる神学者・聖書学者や教皇・大僧正・総主教・監督等から下位の牧師伝道師等に適用し得る場合が多いであろう。

しかし無教会の学者・伝道者は別だとは言ひ難い。反省が必要。今も聖靈による有力な伝道者で以前一流大学の教授

だったある方は、「無教会の知的パリサイ」ということを度々言つて居られる。他のことで同氏を批判したりする人、悪口する人もあるが、氏のこの言や伝道に少くとも現段階に於ては、謙虚に傾聴すべきではあるまいか。

信者として最も肝要なことは「キリストと共に十字架につけられた、もう自分は生きていない……」（ガラテヤ二19<sup>20</sup>）という体験を事実体得すること。その体験がなく、知識や学問があると、それによつて信仰的（と見える）行動や伝道をしたりし、それらの中に於てさえ知恵や学問を（露骨でなくとも、極めて巧みに）誇示するようになり易い。また己に死なず、聖霊を受けていない信者や求道者、殊に未信者は伝道者の学識や地位又話上手などを賞め、それらによつてその伝道者を崇める。また頼りゆく時信仰以外のことでも世話をして貰うことが有効な、口ざわりなどのよい伝道者に付き易い。ある特定の伝道者にそれらが集積していると、その崇拜者によつて団体が作られセクト化する。教会者がセクトすなわち教派を作るのは当然だが、それは福音の敵である。もし無教会伝道者を中心にセクトが生じるなら禍。極力それを防止すべきである。

キリスト教会と信徒間、また信者の生涯に於ていつも絶対大切なことは「栄光は神とキリスト、恥辱は人間己に」ということ。伝道者の一切の伝道において（信者の全行動や存在についても）当人にどんな学識や話術、地位や富がある無しは別、当人の中に生きてい給うキリストが働かれ聖霊のみ業がなされ、キリストが崇められ神に栄光が帰せられ、話下手とか無学識とか罪故に伝道者と人間が恥を負い、聖霊の働き

によつて一人でも二人でも実際に信仰進み、救に入る人があ  
ることが一番大切でないか。

A氏は英語と聖書原語に精しく才能豊か。十年ほど前郷里  
での伝道使命を感じ、会社を退職しO県に帰り、同地方に以  
前から職業傍ら伝道していた良教友と合流、その応援で進歩  
的英語塾と聖研会（大いに感謝して主の祝福祈り上げた）幸  
先よぎやに見えたが、田舎の小市などの事情で漸衰。

私有田畑あつて自家用の米や野菜作り、中学三年の次男の  
為などに収入を得る必要あり、と養鶏を始められた。ある事  
情から相談も受けたので、拙小経験も告げ、一般信者でも本  
筋の信仰を立てば、マタイ伝六章末の聖約の通り必ず衣食等  
与えられるべく、まして使命感に立つ伝道者には全家族も少く  
とも必要最少限度は必ず与えられ、支えられる故、背水の陣  
を布き、信仰以て立たるべく進言もしたけれど、大金を投じて  
千羽以上用の鶏舎建設、かつ農業も拡張、他に志と違つたこ  
ともあり、地理的不利その他事情で大欠損、誠にお気の毒。  
その地区でキリストの名折れとなりつつある由聞き悲嘆。  
四、五年前同地方他教友方での集會に來られたので種々言い  
難い事情あつたけれど、主に在り御靈に感じて、他前例もあ  
り信仰的最善と思われる対策を進言したが駄目であつた。そ  
の前、主の恩恵で折角与えられた助けも、異見で掌中の鳥を  
逃がされた。残念至極。御恩寵により再興されるよう切禱し  
ている。

全知全能全愛の父なる神に絶対信頼し、信仰以て背水の陣  
で数年間耐苦、辛抱してゆかれたなら、遂行されたと思ふ  
（今後を期したい）。

前記聖句や上に引用の聖言により述べた通り、信仰を以て  
立つなら、生活その他の必要は必ず与えられるのである。何  
かの場合、必ず「時機を得た助けへの憐みを受け恩恵を得」  
られるのである（ヘブル四16、試訳）。筆者は大まかに言えば  
四十年來、少くともここ二十四年の恩恵の体験から確信を以  
て、かく言うのである、且つ聖言は絶対に間違いないと。

但しかく与えられるからといつて「棚からぼた餅」式にずる  
い考えになつてはいけない。何より先ず常に聖言を学び、不  
断の切禱が必要。時には断食また徹夜して祈ること。ある場  
合、殊に絶体絶命というような場合、常識を働かせて臨時に  
小収入のある小事をするのもよい（神様の前に幾分信仰不足  
でも事情により主は許し給う）。また聖旨なら時機を得た助  
けとして何か適当な仕事か伝道者の種々の実状如何により、  
不思議な摂理によつて与えられる。

しかし何時も大切なことは、背水の陣を布いて、人間的作  
為をせず、切禱と信仰を以て一切を主の聖手に委ねること  
である。

内村先生のような大先生でも生涯に三回餓死を覚悟された  
とのことである。まして私共のような微小の僕は、その「七  
倍のまた七倍」のその七倍も餓死を覚悟してかかることが大  
切であろう。

人間相互の関係においても、誠心誠意を以て、心から、か  
く決定的に信頼してゆく時、一般に相手はその信頼に応えな  
いことがあるうか。まして全知全能で天地万物を創造し支配  
していい給い、常に絶対の真実ことに完全愛にいます父なる神  
が、かく全知全霊を以て、命をかけ（餓死を覚悟して）信頼

し、そのみ国の福音を宣伝えようとする僕を支え給わないことがあるか（詩篇四〇、一一八篇等々）。

完全、無限の愛を持ち絶対者にいます父なる神の前に、また全聖全義の神の御独子でありながら、この罪に汚れた俗世に降り人と同じ肉を受け、全人類のすべての罪を背負って十字架につけられ、われらに代って死に且つ甦り給うた完全愛・無限愛・徹底愛の化身なる救主イエス・キリストの前に、不信仰であつてはならぬ。切禱以て全霊全心・捨て身で信頼し奉ること。必ずその信頼に絶対応え給う。

要はキリスト教的坊主にならず、飽くまでも平信徒たる信仰と精神に堅立し（前言の如く誰もが少しでも伝道すべきであり、伝道の責任を感じ、聖霊のささやきを感じたなら）切禱の中に伝道の使命感に立つて邁進すること。かく使命感のもと、前述の通り、背水の陣を布き餓死をも覚悟で、熱禱の中に絶対信頼を以て臨み突進すること。

主キリストの十字架の最大苦痛の犠牲と復活により、すべての罪を赦され、ただ信ずるだけで義とされ、永遠の生命・神の国に救われることの体験と平安や希望や感謝・喜びの故に、真の信者なら黙して居れず、じつとして居れず、証しせずには居れないはず。己が罪のため、忝（かたじけ）なくも完全に聖く義しい神の御独子が十字架上、われらの想像することも出来ない苦痛をなめ給うたことを思え（マタイ二七46、マルコ一五34、ヘブル一二23等参照）その他万種無限の御恩寵を思え（詩篇一三六一―9。エペソ書一3―14、三二―13等参考）。何という有難い勿体ないことか。感謝感恩の念に溢れ、それを証しせずに居られようか、伝道せずに居れようか。「われ福音伝道しても自慢にはならぬ、止むを得ないか

らだ。もし福音伝道しないなら、禍だから」である（コリント I 九16。試訳）。

かくして一切を忘れ、すべてを聖手に委ねて起上り一途前進すること。神の栄光を目ざして。

一切職業などせず、専身伝道者として立つ時、線香花火で終つてはならぬ、どんな困難があり又外見上いかに貧弱でも永續することが大切。一たび使命を感じて起上った以上、最後まで続けるべきである。そしてどこか一定の揚所で定期集會を持ち更に月刊雑誌か季刊誌を出して長年間伝道続ける場合、いつも自分の救われた経験や恵まれた証詞を述べるだけでは行詰つてしまうだろう。そこでその体験や証詞だけでなく、広く根本的にキリストの福音を、イエス・キリストを宣伝える本質的伝道をしなければならぬ。聖書を講解せなければならぬ。

その為には相当の準備期間を持つて、又は伝道と併行して、聖書の勉強、併せてイスラエル民族史やキリスト教史・パレスチナ地理風俗等（概略でも）を学んでおく必要あり、更に聖書原語（殊にギリシャ語）やキリスト教文学・哲学史や一般ことに自然科学の概要と心理学等々関連あるものを一通りやつておく、後日もある、のがよい。

優秀婦人伝道者もあるが、古来有力な伝道者は大部分男子である。献身者が力強く伝道するには独身の方がよいとの意見が昔からある（古来カトリックの教職、神父や修道僧も表面上独身主義である）、妻子一係累があると、多子ほど生活難に陥る公算多く、生活苦の故に伝道が片手間になつたり、止めてしまう場合もあり得るから、更に迫害に会つた

時、弱い妻子が可哀そうだから、尤もなことと思われる。それ故か、大使徒パウロも独身であったか、元結婚はしたが献身してからは夫人と生活また行動を共にしなかった（コリント I 九 5）。

しかし一般に妻は伴侶・内助者として必要。神様の本旨であり、結婚は神の制定である。特殊の人は別として、伝道者皆結婚すべきである。結婚は神聖である。伝道者の場合ことに然り。カトリックで独身「聖職」は一般人より聖潔だと宣伝しているのは大間違い。真に聖いか否かは、外形よりも心の問題なのだ。妾を持った法王（教皇）が多数いたこと史実あり、今も神父がいることを聞いて居る。

一般に妻の内助により、より大なる働きが出来るのである。また全家族の生活について、時間の余裕ある妻の内職その他働きで生計の補足また支持可能の場合あり、現にその実例も多い。更に成るべく純粋に福音伝道するに当り、妻子があるのが心配苦勞も多いけれど、安楽な伝道生活よりも、苦しい中に（主に在りて一切の苦痛に耐えて）伝道するのが一層貴く、一層神の栄光顕現となるのである。たとえ表面上伝道の成果は少なくなったように見えても（コリント II 四 7-15。コロサイ 一 24 以下等）。

人の弱さにつけこむサタンの誘惑にまけて、伝道者でありながら婦人問題を起し、伝道生活を失敗する例も多いそうであり、「李下に冠を正さず」で、通俗論なれど一般にその意味からも結婚するのがよい（コリント I 七 参照）。その他生活全般に亘り、信仰に基づき道徳的に清く正しく、その行動・更に存在が信仰、然り伝道の立証となることが大切。言葉でいかに立派なことを唱えても、行動や生活態度がそれに伴わ

ないなら、伝道は逆効果となるのである。ロマ書十二章等参考あれ。

誰しも人間として完全でなく、それぞれ欠点や弱さあり、何をするにも完全無欠なこととはできないが主のお助けにより、出来るだけ純粋に福音信仰に堅立し、その伝道に努め励まねばならぬ。

教会の歴史や事実を否定したり、する訳ではないが、教会の組織制度や偶像性と諸儀式等は純福音・聖書真理に基くものではない。従つて多くの場合、教会伝道者の説くキリスト教や関連言説には純福音・純聖書的でないものが混入していることが多くある。そして一般に教会無教会を問わず伝道者は常に聖書を深く学んで行く必要がある。

原則としてキリスト者は、現況に於て無教会主義に進むべきである。そして無教会信者はもつともつと伝道に励まねばならぬ。無教会陣には、余りに伝道者ことに専身伝道者が少な過ぎる。もつと多く伝道者が輩出せねばならぬ。

東京など大都会には有力な伝道者も多いが、田舎には非常に少く、全然なかつたりする。何故か、それは田舎での伝道には生活難その他の困難や不便が多いからでもある。果して然りとするなら、かかる考え方や態度は未信者や教会主義者のそれであつて、純福音信仰に生きる者・真の無教会信者のそれではないであらう（特殊の場合は別）。

もちろん都会伝道も必要である。しかし田舎伝道はより多く必要である。病者逆境者への伝道・病院療養所伝道・刑務所伝道等働き人をもつと必要としている。都会の多数伝道者をもつと田舎に分散できないだろうか。田舎にももつと伝道者出現



すべきである。もし田舎定住の伝道が困難であるからと逡巡するなら、キリストの僕Ⅱ伝道者として臍甲斐なくはないか、従つて不信仰的ではなからうか。

一八九〇年来日した聖公会の宣教師・英国貴族バックストンは着後、同志等と祈禱相談会を開き、「最も伝道の困難な所に遣わし給え」と祈り、山陰が一番困難というので山陰の中心地松江に行き伝道、中々信者でぎず、施しや種々の方法を用いたりしたそうであるが、同派よりも、メソジストなど潔め派の伝道者を多数育成し大業したのである。

昨夏沖繩伝道にいささか用いられ、大部分の牧師宣教師等が殆ど行かない由の先島の宮古島と石垣島、更に台湾に近い西表島にも導かれたが、本島には数人の無教会信者あつたけれど、知る限り先島諸島には一人もいない。宮古の平良市や石垣市には教会が僅少あるが、両島とも田舎・農村には信者がいても教会なく、西表ではなお更。西表は（東側が殊に）内外交通も甚だ不便、道路悪く、乗物も殆ど皆無、電気なく（戸数多集の村では小自家発電で夜四時間だけ点灯）定住医師なく、全体の山は原生林である。この西表と石垣両島の農村に青山学院大出身二十四、五才の山川文敏君が巡廻伝道師として熱心に上手に励んで居られた。私の知る限り、これら先島諸島（八重山群島）にも沖繩本島にも鹿児島県分の奄美諸島にも無教会伝道者は一人もいない。その点誠に残念にも淋しくも感じたことである。

無教会信者中、奮起し、信仰に堅立、沖繩ことに先島伝道に行く無教会伝道者出現を祈る。その出現の時、無教会信者は協力してその働き・生活を支持したいものである（前記山川君は沖繩キリスト教団に所属し、教団から支えられている

とのことであつた。また無教会信者が移住して、職業傍ら伝道することも望ましい。

今や大きく成長した無教会は外国伝道にも適進すべきではないか。ブラジルには邦人多く、無教会信者で職業傍ら集会を持ち伝道している方あれど、他では無さそうである。ネパールの岩村兄もまだ純粹の無教会伝道はできかねて居られる（今後を大いに期待してやまない）。同地その他東南アジア諸国に、南洋に、アジア大陸に、アフリカに、南米や欧米に、然り今や異教墮落国なる米国に行つて大いに無教会伝道すべきである。前述の如く生活は主が支え給うとの確信を以て。復活の主は宣言された、

「行つて全世界のすべての人間に福音を説け」

「天上一切の権能が、わたしに授けられた。それ故に、行つてすべての国の人を弟子にせよ」

と（マルコ一六15とマタイ二八1819。塚本訳）。この聖言を空しく讀んではならぬ。この御命令を上空で聞いてはならぬ。一八世紀英国の大伝道者・メソジストの開祖ジョン・ウエスレーは三十二万km以上の伝道旅行、四万回以上の説教をし、常に「世界はわが教区である」と唱えたそうである。この意気！無教会伝道者もこの意気を持ちたい、老いも若きも。内村鑑三以上、その諸高弟以上の一大無教会伝道者輩出せよ、殊に若人に。

既述の如く平信徒誰もが伝道の責任を負い、上を仰いで前進すべく、もし直接それができないなら、何らかの方法で伝道者に協力し、それを助け、間接的にでも伝道をすべきで、その方法は目をあけて見、真剣に求め考えるならば、誰にも出来

ることがあり、用意されているのである。それは主がひとしく与え給う恩恵である。

伝道者は一般信徒の献金等を当てにすべきではない。人に頼つてはならぬ。飽くまでも天父に、救主キリストに絶対信頼し、一切必要をば必ず与え給うとの確信を以て前進すべきである。神に頼らず、会員信徒その他に献金寄附を頼んで彼らに首の繩をひかれては純粹な伝道はできない。首の繩は神にのみひかれ、主が与え給うもので、たとえ餓死するともよしとするならば続け得るのである。

戦前朝鮮（たしか京城）で一牧師が飢え死にした由聞いたが、他には全世界に伝道者の餓死した例をまだ聞かない。使命感により信仰を以て立つなら、四十年間荒野放浪のイスラエル民族大群衆を天からマナを降らせて養い（出エジプト一六等）、また迫害で逐われたエリヤをケリテ川の畔で鴉によつて食物を運ばせて養い給うた（列王上一七三―一六）ように、また主イエスがガリラヤ湖畔で男だけでも五千人の群衆をパンの奇跡によつて満腹させ給うた（マタイ一四一三―一四、マルコ六三二―三三、ルカ九一〇―一七、ヨハネ六一―一三）如く、場合により父なる神は奇跡を以てでも必ず養い給うのである。

下

わたしはキリストにある一人の人を知っている。彼は幼少から軍人志望、武骨者、上品臭い教会流キリスト教を嫌つたが、ある上官の説得により内村艦三唱道の日本の無教会主義キリスト教を信奉するに至つた。後病休中一層聖書を学び信仰も進み、人生観一変、軍人として尽すのは眞の愛国でない

と悟り退いた。後二、三回大病し、復健後伝道に進むべく切禱、まだ病中から病人伝道、復健、二六才孔版印刷で伝道誌月刊、当時貧民窟的の生活だった由である。

家族は父君一人、事業失敗で住家も人手、自暴自棄で飲酒耽溺。その中で彼の信仰鍛えられた。戦時下戦魔に戦いを挑み、キリストによる平和実現の為に尽そうとした。彼如き小者は軽く遠くへ吹飛ばされ、最後のケリがつくの一年近くかかった。主にある先輩や教友が彼を愛した。

不思議な恩恵で彼の生活は支えられた。その摂理で私塾など少し。弾正中絶まで赤字のまま月刊誌発行も続いた。昔父君の住宅新築の時二口で二百円という大金の負債あるを十余年後知り（当時米一升四十何銭）数年苦勞して拵え、他飲酒代未払いも調べ代済し、神の栄光となったという。

信に立てば衣食も健康も結婚も神意必要は一切与えられるというのが年来の彼の信。筆禍事件審理中から縁談起り、順調成立、特異の結婚式。上京し種々事情から世的職業もし、聖書勉強。戦局苛烈下父君急死を契機に切禱、何か聖旨を感じ、困難の評あるS地方で伝道すべく、末期近く岳母同伴帰郷。終戦前後混乱期には余り伝道しなかつた。

生活不安が夫人方の心を襲い出したそうだが、主のお守りを信じ、徐々伝道、市内、農村も歩き廻り、汽車・電車等ある所も半分位また十数キロ全行程、且つ数回素足で歩いた由。定期集会も開始（月一回から後毎日曜）、徐々隣県にも伝道。生活面でも苦勞し（戦中戦後四子生れ、二年間七人家族）終戦前から野菜類作りや度々農村に籾米以外、南瓜や甘藷買ひ、戦後床屋行き止め、その他徹底的儉約。また信仰的根拠で米粒一つも粗末にせぬ家憲。他家で与えられた小鰻頭

一つを四児分食など涙話沢山。卵で少収入を得ようと秋初生雛二十羽育てたら大部分病死、泣くにも泣けぬ思いだった由。四、五羽の産卵、乳幼児に殆ど与えず、時々某家で買って頂き、上二人種々手伝い、欲しかったのに辛抱した由。

少女時代から病弱だった由の夫人、次々の出産にも不思議に支えられ、母乳少しは出たけれど、四子共人工栄養。終戦前後でミルクも牛乳も離乳食品も中々得られず、涙の育児。第四子出生前年夏と次の夏マラリヤと急性肺炎、必要また欲しがった水も殆ど買えず、遠くから幼児が度々清水を汲み来た由。特殊事情で希望され信仰雑誌取次がれ、手数料を少し与えられあり、夫人が市内の某教友に届ける時親譲りの腕時計紛失、その二年後に彼の巡廻伝道不在中、ある病友が貸して下さっていた自転車で十才の長子が同誌を届けに行く時まだ下手で転び手の骨折など試煉もあつたという。

その翌年彼は九州等巡廻、F地で無教会集会・病院刑務所伝道等の後ある豊かな教友が四、五人の方と共に同地の有名な若鳥料理だか饗応せられることになった時、彼は当時「祖国の憂うべき現状を思い、妻子が赤貧の暮しをしているのを思い折角の有有御好意ながら、その御馳走を頂く気になれません」として辞退し、伝え聞いた心ある信徒は感動された由。その代りとして同家で大層御馳走、珍しいバナナなど（彼の住む田舎では殆ど見得ず）、出発の時数本を車中で食べよと恵与され、一、二本勿体なく頂いたが、残りを家に送り、皮が黒くなっていたが皆で分けて頂いたそうである。

その翌年彼は長日数巡廻、戦後初めて上京、ある先生の集会で小証言、月余で帰宅するや五才の末女に与えたおみやげ十円玉一つ、飛上らんばかりに喜ばれたとか。そして右集会の

会員数人から自転車贈られ「エホバ・エレ」、以後彼の田舎伝道、時に隣県にも遠く高い山脈越えにも利用。

当時彼一家の住宅は戦前ある信仰的用途に使われ大分古ぼけ、不思議な恩恵で終戦前与えられ、次第に朽損、特に雨漏りひどく、何回も彼の手で修理したが短期有効、或梅雨の大雨の時は滝の如き落下を四斗樽で受けたとか。右の翌年某先生が行かれ彼の両県伝道地を廻り彼が断つた由なるに積極的至愛から或方法で屋根修繕のためと募金され、多数信友の協力あり、目標以上贈られ一年半後改築という素晴らしい恩恵与えられ、十年余の今も彼らは深く感謝している。

その一、二年後かサタンの働き珍現象、その心労等で夫人は心臓病に罹りなど苦しい試煉、彼生来短気だったが黙々隠忍、涙の切禱で越えた由。次年か夫人心内炎の重病中、或信友の愛信の中に、伝道者の子は義務教育だけで可との言あり病床を涙で濡らしたという。冷淡の言の如く見えたが、彼はそれも感謝した。背後に大先輩の愛の忠言に基く旨翌年通報された由。主の恩寵は人意以上で四子共奨学金最大限利用なれど相次いで高校に行くを得た（後大学にも、今も）。

彼は良い面の日本武士道精神を尊ぶ。人知れず度々涙を糧としても「武士は食わねど高楊枝」。彼の貧苦伝道に同情する人々あり、彼がO地方に巡廻した時（まだ子達幼少）OS両地方の教友五、六人共同じ後援会的に毎月献金したいとて某教友が代表して申出でられたのに（某先生は彼が大喜びするに違いないと言っていた由）案に相違して彼は辞退した（大必要を前に彼の心は甚だ動いたそうなのに）。翌朝同兄が彼の断る理由を糺したら大した理由なかつたとか。その頃やその後既に届いていた又贈られる寄附献金を彼は返上した

り断ったことあり。内村鑑三流に独立を阻害されるとか、その他何か深意あるのか。後年軍人恩給復活の時某先輩から、資格ある故受けよと用紙まで送られたのにそれも彼は断った由。意固地な彼。

そんな彼をも（或はそれ故）主は支え給う。昔彼が山奥で一週間滝を浴び断食の切禱と瞑想の時（30キロ余の道自転車往復）、特別逆境病者を訪ね遠い県内や隣県に往復自転車や銭不足でバスに乗らず山路を空腹に歩いた時など、人に頼らず、自然にいつしか或食物が備えられていたという。長年間に度々彼や家族のため又伝道用に送主不明の種々金品送られたり、主が人々を動かし給うて、また彼らが全然予期していなかったのに、色々な方面の方々から同様度々贈られた由。更に昨年頃まで十年位（時に幾分辞退した由なるに）毎月献金を贈られた二方があったそうである。それらが非常に彼の伝道や生活の助けになったのであった。

彼の口による伝道は居住地での毎日曜聖書集会、県内三市町月一回集会、県内外、全国的巡廻、一寸海外にも。その中一番力を入れてるのは当然居住地のと言えよう。同集会のため一番多く準備する由であるから。会員は市内外可成り広範囲から、七、八年前迄は出席者相当多かつたが、彼の無力や馬鹿正直や下手から、去つて他集会また教会に行くらしいのや、昔病中や結婚に相当尽した由の信者も冷えて去り、厳しくてついて行けないとて去つた親子や、外国行き、召天者等で人数も次第に減り、今は少数らしい。夫人の信仰の恩師というべき遠い先生は十六、七年前都会の如く会費制にするよう奨められた由なるも、種々困難な事情ありと思われ、集会の時だけ目立たない所に自由献金小箱が置いてあるが、知つ

て知らでか入れる人も全然入れぬ人もあり、箱の底が空のことも度々あるらしい。それでも彼は一回も不平を言わず、黙々、他に口外せず、これも試練として感謝し、続けて居り、長年の体験で悲壮な思いもなく、諸物価が値上がりしても主が必ず必要を与え給うと確信し、平安を与えられ、誰にも頼らず、いつも餓死を覚悟して（近年は聞かないが、以前は度々彼が言ったのを聞いた）黙々やつてゐるらしい。

「右の彼を筆者熟知、都合で匿名、凡て神の栄光の為」

背水の陣を布き、全知全能全愛にして、先ず神の国と義とを求める真信者に必要以上に添え与え給ひ（マタイ六）、且つ罪に沈み亡ぶべき我らを、御独子を犠牲としその貴い十字架死により救い給う（ロマ五6以下等）父なる神に絶対信頼し、捨て身の信、然り福音伝道に邁進する時、右例で実証の通り主は必ず本人と共に家族をも支え給う。重複ながら無教会陣に多い片手間伝道も必要であるが、伝道の責任感強められ、一層多く伝道したい、せねばならぬ霊感受けたら、使命感もて一切職業を止め、献身伝道に進むべきである。常識を棄て上を仰いで突進すべきである、使命感で伝道するのに、生活不安などから躊躇し逡巡するなら不信仰であろう。矢内原先生のような有能な方は総長の激務と有力伝道を充分果されたが、一般者には困難、たとえ有能であつても専心やるなら一層強大伝道できるはず。主は必ず生活等必要を与え恵み給う。聖經中数多記しある聖約（コリント一四一15等）をただ信じ進むのみ。

右コリント一四の聖言は献身伝道者も一般信徒にも甚だ重要、こういう聖言は学んで解意するよりもその要求指示して

あることを実行することが大切。伝道者に協力することを神も喜び給うであろう。仏教でも功德は廻向し善果が己に返り来ると教え、伝道の書十一章初やレプタの教（ルカ二一初）等の如く貴重な協力ほど報賞は益々増大するのである。

今や祖国の諸方面は混乱と罪悪と窮状、腐敗墮落を極め、聖書真理によれば、世は一路亡道を驀進しつつあり。キリスト者たる者坐視して居れようか。亡ぼんとする魂を愛し、救の福音を強く宣伝せよ。

Ⅰ「求道」第二二〇、二三三、二三四、二三五号

（一九六八年七月、一〇月、十一月、一二月号）Ⅰ